

草子ブックガイド  
早稲田文学編 8

玉川重機

人は大切な物が傷つけられた時、何かのせいにしようとし、なぜ、そうなったかを直視しない



『荒野のおおかみ』の主人公、50歳になる作家  
ハラー・ハラはまさにそんな男です



ハラは不運の連続で  
身心共にボロボロ  
生きつらさを心の中の  
『おおかみ』のせいにします

そこには死をも忘れさせる  
高級娼婦ヘルミーネ、  
その友達的美青年パブロが  
いました

自殺も出来ないハラは  
居酒屋「黒むし屋」に飛びこみます

ハラはそれまでの自分を  
捨てて、二人に染まろうとします



若返り、  
夜通しダンスを  
踊ったハラは  
パブロに  
「魔術劇場」に  
案内されます



あなたがたの  
求めるものが  
待ち受けています



魔術劇場にはドアが  
たくさんあり、その中には  
幻の世界がありました  
ハラは幻の快楽に  
次々と身を  
まかせます

ドアに書かれていた掲示

「どの女の子も  
みな お前の  
もの！」  
「ああ、千枚の  
古が  
あったら！」  
「カメラ  
ストロ  
(愛経)  
いざいざ  
愉快な  
狩りに！」  
「人格構成への  
手引  
むなしすぎます」

そんなハラは、尊敬するモーツアルトに  
幻の中でこき下ろされます

「何か何かも  
盗んで来た  
集め集め  
盗寄  
ないか」



誰かの「影響」を受けて  
「自分」が出来あがる  
それが「盗んだ」事だとしても  
大切な目をそらしては  
いけないのでは

笑いとばした  
モーツアルトは  
見つけたのなら  
覚悟を決めると  
言っているよう  
でした

見られないのを、おおかみのせいにして  
幻の劇場をさまようのは悲しい

ハラはそれに気付いて  
幻に終止符を打つためか

愛するヘルミーネをナイフで  
刺し殺します



ハラは行動は私には  
自分の本当の人生を  
取り戻そうとした

おおかみにも快樂的幻にも  
負けず、  
本当の自分を見つめる事に  
気付き始めたハラに  
モーツアルトが語りかけます

大切な何かと  
再度、対峙しようと  
したように  
思えました

私も自分の不運を  
笑いとばして  
悲しい出来事を

見つけられた大切な事を  
追い続ける事が出来たらと思いましたが

その道を  
本と歩いていけたらと  
思いました



おしまい

悲壮ぶりや殺害は  
もう打ち切りに  
しなきゃいけない  
笑うことを  
学ばねばいけない

パブロのようにも見たという

『荒野のおおかみ』を読む17冊めに入った『草子ブックガイド』第3巻、好評発売中！ ほかにも『雨月物語』、『百鬼園日記帖』、『イワンの馬鹿』、『ハローサマー、グッドバイ』、『新しい人眼ざめよ』編を収録！ 初恋のきらめき、親との別離……。傍らには、いつも本がいてくれた。14歳の草子が紡ぎ出す爽やかな読書体験記。『草子ブックガイド』公式ツイッター (@soukbookguide) もチェック！